

## 法然における現世の捉え方一病と現当の両益に注目して一

佛教大学准教授 齋藤蒙光

法然遺文においては、現世利益に関する説示の中で、しばしば病への言及がなされる。未来往生を目的とするはずの法然が現世利益を許容することについては、先行研究において評価が分かれるところであるが、その要因の一つとして、論者ごとに現世利益論の前提となるべき法然浄土教の死生観に対する理解が異なることがあると思われる。そこで本発表では、法然の死生観、特に現世の捉え方に注目したい。

『要義問答』の冒頭において法然は、現世で嘆くべきこととして病と道心のないことを挙げ、そこから人生、さらには六道輪廻における無常と苦しみを説き、往生極楽を求めるように促す。『十二箇條の問答』においても、常に思うべきこととして、輪廻の苦しみや人の身を受けることの貴重さなどを説くが、これらの説示は、源信著『往生要集』の正文第一「厭離穢土」を意識していると思われる。法然の死生観は、基本的に平安後期の浄土教を踏襲しており、ただ一度の人生のみならず、輪廻における終わりのない苦しみをも問題視している。

もっとも『往生要集』は、六道輪廻の因果や事観としての観想念仏について詳説する一方で、理の菩提心や懺悔にも言及する。伝源信撰『観心略要集』では、理の側面がさらに強調され、「生死即涅槃」のような天台の死生観が強く打ち出される。そこでは生滅変化する現象世界と不変常住の本質世界とが不二一体とされ、輪廻の「淵病」として、無明による認識の偏りが問題視される。

法然も『選択集』第十一章において、「無明淵源の病は、中道府蔵の薬に非ざれば即ち治すること能わず」と記すが、それを傍証として「今、此の五逆罪は重病の淵源なり、亦此の念仏は靈薬府蔵なり」と説く。法然においては、因縁により生滅変化する現象世界のみが問題視され、五逆罪のような悪業が生死輪廻の源と位置付けられるのである。その上で法然は『選択集』第十一章において、念仏三昧の滅罪の力を強調する。それにより業報という要素は希薄化され、法然における輪廻は人間存在そのものの有限性の表現という意味合いが強くなる。

さらに『選択集』第十一章では、第一章に引用した「遠劫より以来…今に至るまで自ら生死に輪廻して、火宅を出ざる」という死生観と対になるように、道綽著『安楽集』に則して現当二世始終の両益を説く。今生に至るまでの生死輪廻と対比するならば、念仏を行じる瞬間から滅罪・護念に預かるという現益と、命終と共に往生を遂げるという当益・始益、そして成仏まで阿弥陀仏と逸れることがないという終益までが一連の利益として受け止め得る。法然は滅罪が「転重軽受」をもたらし、護念が横難横死を防ぐため、「延年転寿」に預かると説くが、寿命を延ばす機能よりも、限りある寿命を最大限生きることができたと満足するという点に重きを置いていると思われる。

〈キーワード：法然、死生観、現世利益〉